

昏れながら

松岡隆子

秋はしづかに人ごゑも風音も
鳥声に近づいてゆく秋の階
さやけくて人とは違ふ径をゆく
あてもなく木犀の角まがり来て
見覚えの秋の日傘と思ひしに
萩は実に風がさみしくなりにけり
秋光の一筋となる蜘蛛の糸

うろうろと急いでをりぬ秋の蟻
誰もをらぬ十月桜の樹下の椅子
暇さうに風船葛など数へ
昏れながら飯桐の実の赤くなる
添水鳴る思ひて遠きことばかり

先月末、十一カ月ぶりに再開された「はまゆふ」の句会に出席した。最初に一月に亡くなられた齋藤充さんに黙祷を捧げて句会は始まった。句会が進むにつれてみんなの顔が潑刺とってきた。いま投句したばかりの作品が即座に評価されること、限られた時間内で選句することなどの緊張感、対面しての句会ならではである。十月一日に緊急事態宣言も解除され今月の本部例会は予定通り再開できそうだ。本部例会は一年ぶりである。良い作品を持ち寄り充実した句会を行いたい。